琉球大学学術リポジトリ

大学生の適応に関する心理学的研究2
ー意欲と不安の観点からの分析ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 井村, 修, Shimabukuro, Tsuneo, Imura, Osamu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15889

大学生の適応に関する心理学的研究Ⅱ*

－意欲と不安の観点からの分析－

島袋恒男・井村　修**

Ⅰ　目　的

大学生の精神衛生上の問題として留年現象は、学生の意欲減退傾向(student apathy)と深い関わりがあると指摘されている（藤土圭三, 1979)。笠原嘉（1977）は、スチューデント・アパシーについて記述し、それが、きちょうめん、仕事好き、真面目、徹底的、完全主義、小心、責任感つよく、人と争えぬなど、強迫心性と関連が深いと指摘している。また上地安昭（1973）は、広島大学の教養課程の学生を対象に「意欲減退度診断検査」を実施し、意欲減退傾向に関わる要因として主体的要因、大学環境要因、社会環境要因３つを上げている、。意欲減退傾向は、笠原の主張するような個人のパーソナリティと関連した準神経症的側面と、上地の調査で明らかになったような集団としての学生気質の変化の側面とが考えられる。しかしいずれにしろ、大学生の適応問題を検討する場合、意欲について分析する必要があろう。一方、新入生は生活面や勉学面で高校時代とは違った大きな変化を体験する。本学は地理的に遠隔地にあり、本土出身の学生の環境要因からの不安感は、入学時に強いといわれている。また青年期は、発達課題としての自我同一性の獲得をめぐって、揺れ動く時期であり不安の体験も適応問題の重要な要素となっている。したがって意欲と不安の２

＊ A Psychological Study on Adjustment of the University Students Ⅱ－An Analysis of Volition and Anxiety to the Life in the University－

＊＊ Tsuneo Shimabukuro. Osamu Imura.

つの観点から大学生の適応問題を考えることは、有効な知見を得るものと期待される。

前回の報告（中村完　等，1986）で、本学の新入生の健康・適応調査の大学適応項目の分析から、適応度を予測する尺度として意欲の軸と不安の軸が抽出されることを指摘した。学部間の比較では、意欲の軸の高の方に医学部、低の方に農学部が位置した。不安の軸に関しては、高の方に教育学部、低の方に短大部が位置した。また出身地域により差が見られ、九州出身者は各県すべて不安高－意欲低の領域に位置し、他地域の出身者と大きな違いを見せていた。性差は女子学生の方が男子学生よりもやや意欲が高いが、不安の軸に関しては差は見られなかった。このような学部間の差や地域間の差は、第１志望の大学であったか否かが関連しているとして、不本意入学者という問題点から検討された。

今回の研究では、前回抽出された意欲の軸と不安の軸にＱ１～Ｑ100の各質問項目がどのように関わっているのかを検討し、大学生の適応度を予測する適切な尺度を見出すことを目的とする。まず各質問項目を数量化Ⅲ類により、いくつかの臨床尺度に整理する。それから数量化Ⅰ類とⅡ類を用い意欲の軸と不安の軸のそれぞれに各臨床尺度の質問項目がどのように関わっているかを見る。

Ⅱ　方　法

１．調査対象

本研究の調査者は前回の報告に同じく昭和60年度入学の琉球大学の学生1,117名である。調査対象者の性別・出身地域別内訳は表Ⅱ－１の通りである。調査対象者は男子が734名、女子が383名であり、出身地域では男女とも沖縄が最も多く（686名）、次いで九州（327名）となっており、両地域で全体の90％を占めている。表Ⅱ－２は調査対象者の性別・学部別内訳を示している。学部別で最も調査対象者の多いのは法文学部（243名）、教育学部（193名）であり、逆に少ないのは理学部（120名）、農学部（125名）である。

表Ⅱ－1　調査対象者の性別・地域別内訳

性＼地域	関東以北	中部・近畿	中国・四国	九　州	沖　縄	計
男　子	45 (6.1)	34 (4.6)	7 (1.0)	243 (33.1)	405 (55.2)	734 (65.7)
女　子	11 (3.0)	7 (2.0)	0 (0.0)	84 (21.9)	281 (73.8)	383 (34.3)
計	56 (5.0)	41 (4.0)	7 (0.6)	327 (29.3)	686 (61.4)	1,117 (100.0)

( )内％

表Ⅱ－2　調査対象者の性別・学部別内訳

性＼学部	法 文	教 育	理 学	医 学	工 学	農 学	短 期	計
男 子	156 (21.3)	73 (9.9)	94 (12.8)	84 (11.4)	153 (20.8)	112 (15.3)	62 (8.4)	734 (65.7)
女 子	87 (22.7)	120 (31.3)	26 (6.8)	59 (15.4)	6 (1.6)	13 (3.4)	72 (18.8)	383 (34.3)
計	243 (21.8)	193 (17.3)	120 (10.7)	143 (12.8)	159 (14.2)	125 (11.2)	134 (12.0)	1,117 (100.0)

( )内％

2．調査手続

昭和60年度の入学オリエンテーションの時に「健康・適応調査票」を配布し、その場で記入させ回収した。

3．「健康・適応調査票」

昭和59年まで保健管理センターのカウンセラーであった新里里春（現教育学部助教授）が、入学時の呼び出し面接用の調査票として使用していた、100項目の精神的・身体的健康に関する質問項目に、新たに16項目の大学適応項目を追加したものを使用した。その内訳はQ１～Q６：病歴、Q７～Q21：ヒステリー、Q22～Q31：不安、Q32～Q42：心気・恐怖・強迫、Q

43～Q51：うつ、Q52～Q58：分裂、Q59～Q91：身体・心身症、Q92～Q100：脳器質障害、Q101～Q116：大学適応の計116の質問項目から構成されている。

4．結果の処理

本研究では前回の数量化Ⅲ類による分析結果抽出された大学生活への「意欲」と大学生活への「不安」を中心として、同じく数量化Ⅲ類の分析結果抽出された、神経症不安、不安の身体化、不安の外在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向との関連について数量化Ⅰ類、数量化Ⅱ類による分析を実施した。また、各尺度間の相間行列を算出し、尺度の全体的構造について探索し、同じく各尺度毎の平均値を算出した。その際出身地域（九州と沖縄）、性差を比較の視点とした。なお統計分析はすべてANALYSTによった。

Ⅲ　結果と考察

1節　数量化Ⅲ類に基づく各尺度の関係と平均値による出身地域別、性別比較

前回の報告[注1)]で各項目を臨床心理学的に関係のあると思えるカテゴリーに分類し、その上で数量化Ⅲ類による分析を実施した。その結果、大学適応項目に関しては、大学生活への意欲の軸と大学生活への不安の2軸が抽出され、不安・心気症項目に関しては、神経症不安、不安の身体化、不安の外在化の3軸が抽出された。以上の各軸は不安神経症を予測させる尺度である。また、身体の不調感に関しては心身症を予測させる消化器不調感と循環器不調感の2軸が抽出された。さらに臨床心理学的に重篤な問題を予測させるものとして、うつ傾向と分裂傾向の2軸が抽出された。本節では

注1）中村、新里、島袋、井村、1986．大学生の適応に関する心理学的研究　法文学部紀要．社会学篇　第29号

数量化Ⅲ類によって抽出された各軸（尺度）の相互関係を確認した上で、各尺度上での出身地域差（九州と沖縄）及び性差について検討していくことにする。

表１－１は全被験者を対象とした各尺度間の相関行列を示している。大学生活への意欲が学生生活での適応につながる尺度であるのに対して、他のすべての尺度は学生生活での不適応を予測させる尺度である。従って大学生活への意欲の尺度は他のすべての尺度と高い負の相関が予測されるといえよう。しかし表に示される結果から、大学生活への意欲と他のすべての尺度の間には高い負の相関は見られないことがわかる。わずかに大学生活への意欲と神経症不安（ｒ＝－0.240）、うつ傾向（ｒ＝－0.358）、分裂傾向（ｒ＝－0.294）の間に負の相関が見られるだけである。この結果は大学生活への意欲の項目にいわゆる社会的望ましさの要因が影響していることが考えられる。しかしそれにもかかわらず、不安傾向が高く、かつ精神病理的傾向の高い者は大学生活への意欲の低下をうかがわせていることがわかる。

次に大学生活への不安は他のすべての尺度と高い正の相関を示すことが予想される。しかし表に示されるように、大学生活への不安は、神経症不安（ｒ＝0.382）、不安の身体化（ｒ＝0.297）、分裂傾向（ｒ＝0.383）とある程度の相関を示しただけであり、他の尺度とは高い相関がないことがわかる。多分にこの結果は、大学生活への不安が一貫した個人的傾向を示す特性不安の水準を反映する以上に、初めての沖縄、初めての大学生活という事態がひき起した状態不安であることを予想させている。それにもかかわらず、神経症不安、うつ傾向、分裂傾向の有無は大学生活への不安を十分に予測させている。また表に示される結果から、神経症不安、うつ傾向、分裂傾向間の相関が高く、不安エネルギーのうっ積ということで共通しているのであろうか。それに対して、不安の外在化、消化器、循環器不調感は相互に相関が低く、かつ他の尺度とも相関が低く、不安エネルギーのうっ積がないことを予想させている。

このような尺度間の関係は第一志望率の大きく異なる九州出身者と沖縄

表1－1　各尺度の相関行列（全体）N＝1038

尺　度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	−0.157							
神経症不安	−0.240	0.382						
不安の身体化	−0.017	0.297	0.317					
不安の外在化	−0.149	0.172	0.290	0.165				
消化器不調感	−0.116	0.189	0.272	0.200	0.099			
循環器不調感	−0.106	0.132	0.269	0.257	0.104	0.203		
うつ傾向	−0.358	0.203	0.356	0.117	0.231	0.228	0.221	
分裂傾向	−0.294	0.383	0.566	0.249	0.293	0.249	0.263	0.497

表１－２　各尺度の相関行列（九州）Ｎ＝305

尺　度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	−0.128							
神経症不安	−0.249	0.381						
不安の身体化	0.045	0.272	0.256					
不安の外在化	−0.055	0.179	0.280	0.194				
消化器不調感	−0.139	0.154	0.251	0.235	0.154			
循環器不調感	−0.096	0.150	0.273	0.300	0.156	0.319		
うつ傾向	−0.476	0.260	0.389	0.121	0.194	0.317	0.344	
分裂傾向	−0.315	0.404	0.562	0.225	0.240	0.238	0.307	0.547

出身者ではどのような結果を示すのであろうか。表1－2は九州出身者の各尺度間の相関行列を示している。表から大学生活への意欲は全体的結果の場合と同様に、神経症不安（r＝－0.249）、うつ傾向（r＝－0.476）、分裂傾向（r＝－0.315）と負の相関が見られ、かつ全体的結果の場合よりその値が高く、不安傾向、精神病理的傾向は大学生活への意欲の低下と強く結びついていることがわかる。

大学生活への不安も、全体的結果と同様に神経症不安（r＝0.381）、不安の身体化（r＝0.272）、分裂傾向（r＝0.404）と正の相関を示す結果にある。他の尺度間の関係では当然の如く神経症不安が、不安の外在化（r＝0.280）、循環器不調感（r＝0.273）、うつ傾向（r＝0.389）、分裂傾向（r＝0.562）と正の相関を示し、神経症不安の有無がより強い形で心身症、うつ傾向、分裂傾向と結びついていることを示している。また、全体的結果と異なるのは、消化器不調感が循環器不調感（r＝0.319）、うつ傾向（r＝0.317）と正の相関を示しており、循環器不調感の有無がうつ傾向（r＝0.344）、分裂傾向（r＝0.307）と正の相関を示しているところから、九州出身者の神経症的不安が強く、身体的にも、精神的にも拡散的になりつつあることをうかがわせている。

九州出身者に比較して第一志望率の高い沖縄出身者では、大学生活への意欲、大学生活への不安は他の尺度とどのように結びついているであろうか。表1－3は各尺度感の相関行列を示している。最初に注意すべきことは、大学生活への意欲が他のすべての尺度と高い負の相関を示していないということである。先に述べたように大学生活への意欲の項目に社会的望ましさの要因が影響しているのであろうか。あるいはそれだけ不安神経症、心身症、精神病理的傾向が相対的に弱いのであろうか。同様な傾向は大学生活への不安と他の尺度の関係にも見られている。すなわち、大学生活への不安は神経症不安（r＝0.336）、分裂傾向（r＝0.336）とだけ相関が見られ、それも九州出身者に比べて低い値となっている。しかし神経症不安は九州出身者と同様に不安の身体化（r＝0.306）、不安の外在化（r＝0.293）、うつ傾向（r＝0.331）、分裂傾向（r＝0.564）と相関を示し神

表１－３　各尺度の相関行列（沖縄）Ｎ＝634

尺　度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	−0.049							
神経症不安	−0.195	0.336						
不安の身体化	0.012	0.297	0.306					
不安の外在化	−0.116	0.109	0.293	0.109				
消化器不調感	−0.071	0.181	0.256	0.157	0.013			
循環器不調感	−0.044	0.106	0.266	0.216	0.026	0.145		
うつ傾向	−0.262	0.129	0.331	0.068	0.228	0.195	0.158	
分裂傾向	−0.263	0.336	0.564	0.257	0.342	0.260	0.239	0.461

経症不安は心身症、精神病理的傾向をうかがわせている。しかしながら消化器不調感、循環器不調感はうつ傾向、分裂傾向との相関は見られず、九州出身者のような神経症不安の身体的、精神的拡散傾向は見られていない。

先述したように出身地域によって各尺度間の結びつきが若干異なることがわかったが、このような各尺度間の結びつきは男子と女子ではどのように異なるであろうか。

表1－4は男子の、表1－5は女子における各尺度間の相関行列を示している。表1－4、表1－5から男女とも大学生活への意欲は神経症不安（r＝－0.245、r＝0.25）、うつ傾向（r＝－0.364、r＝－0.366）、分裂傾向（r＝－0.301、r＝－0.299）とだけ負の相関を示し特に男女差は見られず、男女とも神経症不安が高く、精神病理的傾向を示す者は大学生活への意欲の低いことがわかる。大学生活への不安は男女とも神経症不安（r＝0.389 vs r＝0.367）、分裂傾向（r＝0.387 vs r＝0.375）と同様の関係を示しているが、男子では不安の身体化（r＝0.334）との結びつきが見られる。男女による差異が著しいのは、神経症不安と他の尺度との関係である。すなわち男子の神経症不安は不安の身体化（r＝0.348）、不安の外在化（r＝0.333）、消化器不調感（r＝0.319）、循環器不調感（r＝0.309）、うつ傾向（r＝0.372）、分裂傾向（r＝0.582）と正の相関が見られ、神経症不安の身体的・精神的拡散傾向が見られるが、女子の神経症不安はうつ傾向（r＝0.325）、分裂傾向（r＝0.541）と正の相関が見られ、神経症不安の身体的拡散傾向が見られていない。

以上に述べてきたように、各尺度間の結びつきに少なからず出身地域差、性差が見られるが、各尺度の平均値では出身地域差、性差が見られるであろうか。

表1－6は出身地域別に各尺度の平均値を比較したものである。当初予測されたように大学生活への意欲の尺度では第一志望率の高い沖縄出身者の得点が高く、大学生活への不安では逆に九州出身者の得点が高い結果にある。また同様に神経症不安、不安の身体化、不安の外在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向のすべての尺度の平均値において

表１－４　各尺度の相関行列（男子）Ｎ＝672

尺　度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	−0.148							
神経症不安	−0.245	0.389						
不安の身体化	−0.042	0.334	0.348					
不安の外在化	−0.178	0.147	0.333	0.189				
消化器不調感	−0.110	0.203	0.319	0.201	0.147			
循環器不調感	−0.103	0.129	0.309	0.258	0.164	0.173		
うつ傾向	−0.364	0.208	0.372	0.153	0.295	0.215	0.187	
分裂傾向	−0.301	0.387	0.582	0.285	0.309	0.257	0.312	0.525

表1－5　各尺度の相関行列（女子）N＝362

尺　度	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向
大学生活への意欲								
大学生活への不安	−0.202							
神経症不安	−0.252	0.364						
不安の身体化	0.042	0.231	0.266					
不安の外在化	−0.137	0.222	0.224	0.130				
消化器不調感	−0.118	0.155	0.171	0.201	0.026			
循環器不調感	−0.125	0.136	0.198	0.259	0.016	0.263		
うつ傾向	−0.366	0.195	0.325	0.051	0.131	0.262	0.285	
分裂傾向	−0.299	0.375	0.541	0.193	0.279	0.225	0.166	0.451

表１－６　各尺度における平均値による出身地域別比較

要因／出身地域	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向	分裂傾向
九　州	3.563 (1.069)	2.657 (1.568)	1.566 (1.643)	1.009 (0.994)	0.367 (0.641)	0.449 (0.750)	0.291 (0.697)	0.351 (0.841)	1.204 (1.247)
沖　縄	4.417 (0.841)	1.937 (1.245)	1.142 (1.441)	0.853 (0.912)	0.153 (0.414)	0.285 (0.590)	0.167 (0.516)	0.240 (0.675)	0.878 (1.223)
七　値	−12.65 ＊＊＊	7.21 ＊＊＊	3.97 ＊＊＊	2.47 ＊＊	5.50 ＊＊＊	3.45 ＊＊＊	2.83 ＊＊	2.10 ＊＊	2.13 ＊＊

(　　) 内ＳＤ　＊＊ P＜.01、＊＊＊ P＜.001

九州出身者の得点が高く、九州出身者は不安神経症、心身症、精神病理的傾向の高いことがわかり、その結果として大学生活への不安が高いことがわかる。

次に男女差について検討していくと、表1－7の結果から大学生活への意欲は女子の得点が高く、また不安の外在化でも女子の得点が高いことがわかる。この結果は男子より女子の進学における要求水準が低く、従って自らの進学への満足度が高いことを示し、一般的に女子の恐怖が高いことを反映した結果であろう。しかし、大学生活への不安、神経症不安、不安の身体化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の程度に男女差は見られていない。このような結果から各尺度の下位項目への反応率に性差のあることが予想される。以下2節、3節において大学生活への意欲を代表する項目[注2)]としてQ101の第一志望の項目を外的基準、各尺度の下位項目を説明変数とする数量化Ⅱ類による分析と、大学生活への不安の程度を外的基準、各尺度の下位項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析を実施していくことにする。

注2）大学生活への意欲の尺度は全体的に通過率が高い為、正規分布を示さないことから、項目の適切さと、通過率の程度から、Q101のみを外的基準とした。

表１－７　各尺度の平均値による性別比較

性＼要因	大学生活への意欲	大学生活への不安	神経症不安	不安の身体化	不安の外在化	消化器不調感	循環器不調感	うつ傾向	分裂傾向
男　子	4.024 (1.058)	2.184 (1.497)	1.311 (1.592)	0.934 (0.942)	0.185 (0.472)	0.358 (0.691)	0.216 (0.603)	0.291 (0.795)	1.157 (1.369)
女　子	4.333 (0.866)	2.267 (1.292)	1.355 (1.512)	0.916 (0.994)	0.274 (0.561)	0.294 (0.592)	0.213 (0.604)	0.285 (0.728)	1.204 (1.247)
七　値	−5.20 ＊＊＊	−0.96 ns	−0.45 ns	0.30 ns	−2.63 ＊＊	1.63 ns	0.07 ns	0.12 ns	−0.28 ns

(　　) 内ＳＤ　　＊＊ P＜.01　　＊＊＊ P＜.001

2節　数量化Ⅱ類による「意欲」の分析

2－1　神経症的不安項目の分析

Q22, Q23, Q24, Q29, Q30, Q31の6項目が、神経症的不安を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q22とQ29に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答することがわかった（図2－1）。九州地区出身者では、Q29に「はい」と答えた者は、Q101に「はい」と答える傾向があった(図2－2)。逆に沖縄地区出身者は、Q29に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることが多かった（図2－3）。男子学生では、Q22とQ29に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向があった（図2－4）。女子学生では、Q24, Q29, Q30で「はい」と答えた者は、Q101で「いいえ」と答えることがわかった(図2－5)。以上の結果から、九州地区出身者でQ29の「いつも緊張していらいらしますか」を肯定する者は、第1志望である確率が高いが、沖縄地区出身者では、逆に第2志望であることがわかった。Q22の不安を訴える者は、第2志望であることがわかった。またQ23とQ31の項目以外の項目が、Q101と関連が強いことがわかった。

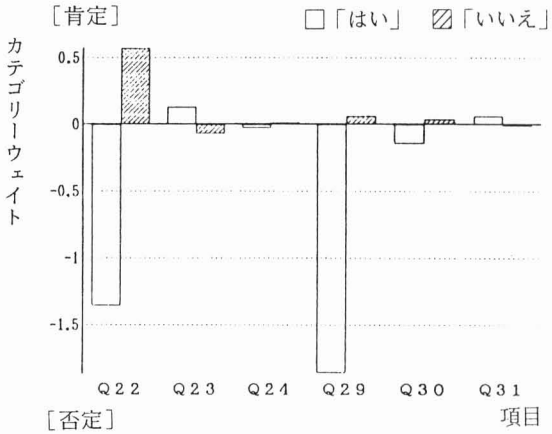

図2－1　神経症的不安項目の分析（全体）

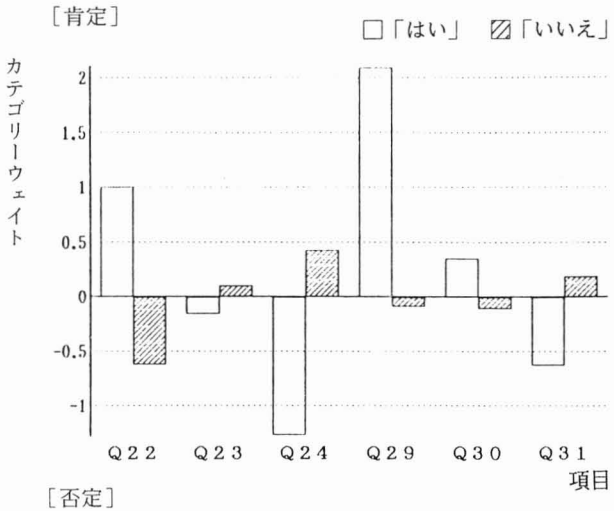

図２－２　神経症的不安項目の分析

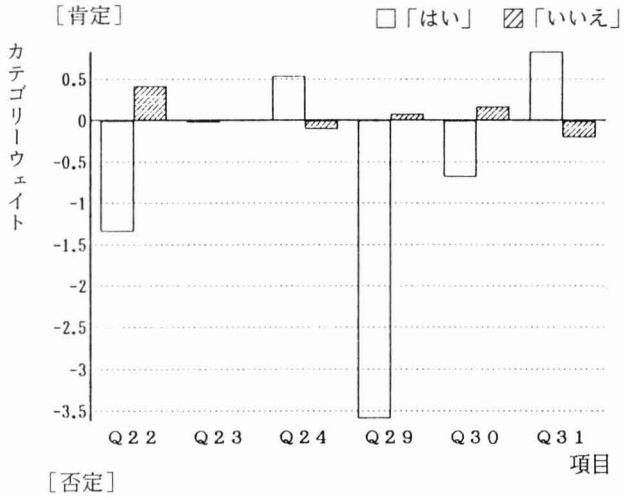

図２－３　神経症的不安項目の分析（沖縄）

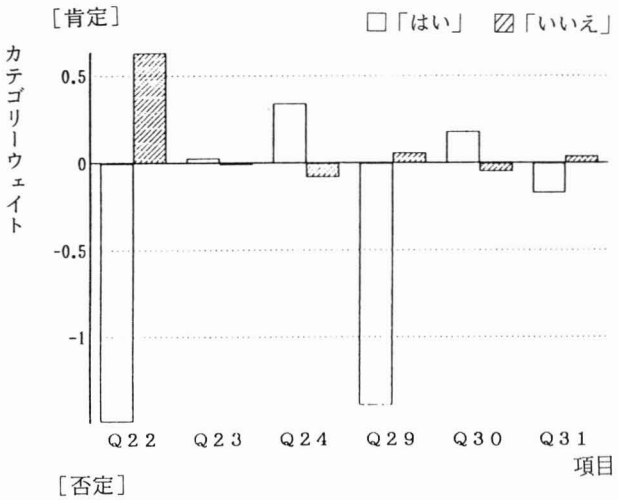

図２－４　神経症的不安項目の分析（男子）

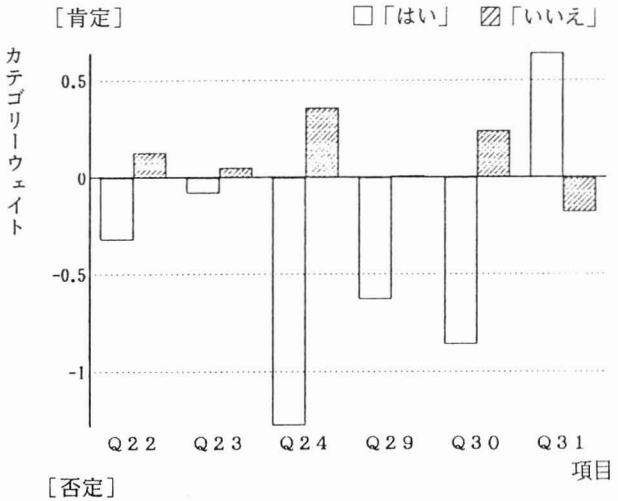

図２－５　神経症的不安項目の分析（女子）

2－2　身体的不安項目の分析

Q32, Q33, Q34, Q35の4の項目が、身体的不安を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q33とQ34に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向にあることがわかった（図2－6）。九州地区出身者では、Q32に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答え、Q32に「いいえ」の場合はQ101に「いいえ」であった。またQ34, Q35に「はい」と回答した者は、Q101に「いいえ」と答える傾向にあった（図2－7）。沖縄県出身者では、Q33, Q34に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答することがわかった。Q35に「はい」と答える者は、Q101で「はい」と答える傾向があることがわかった（図2－8）。男子学生では、Q33, Q35に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えていた（図2－9）。女子学生では、Q34に「はい」と答える者は、Q101に「いいえ」と回答する確率が高い（図2－10）。以上の結果から、身体的不安を訴える者は、第2志望者に多いことがわかった。特にQ33, Q34がQ101と関連が強いことがわかった。

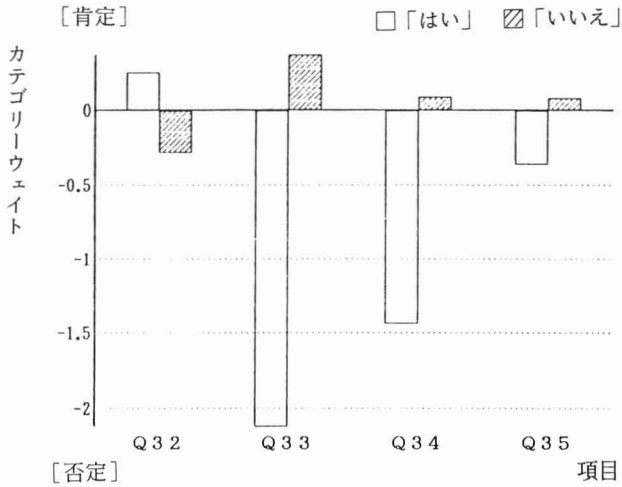

図2－6　身体的不安項目の分析（全体）

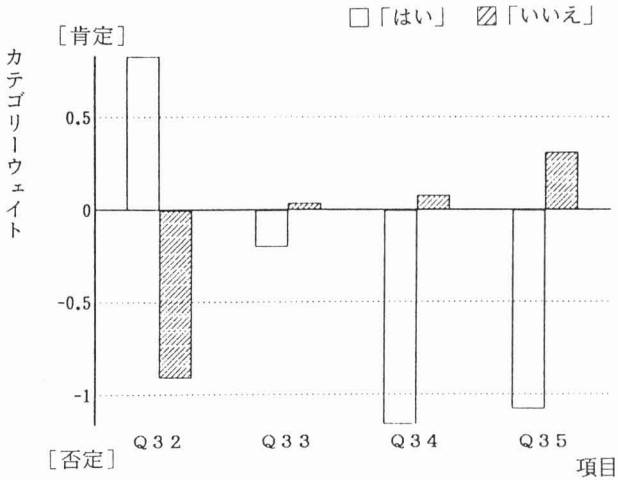

図２－７　身体的不安項目の分析（九州）

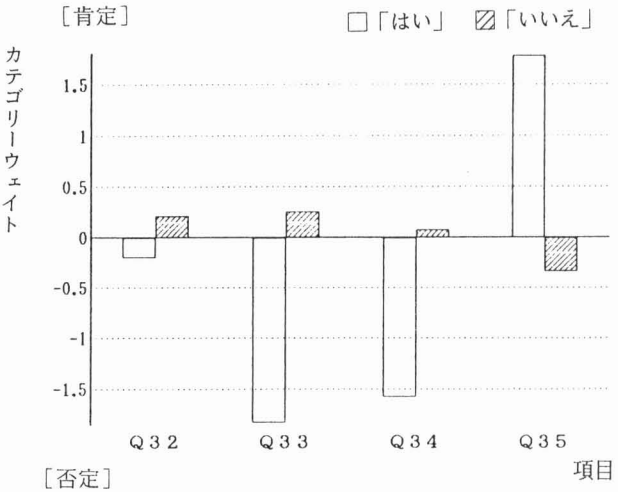

図２－８　身体的不安項目の分析（沖縄）

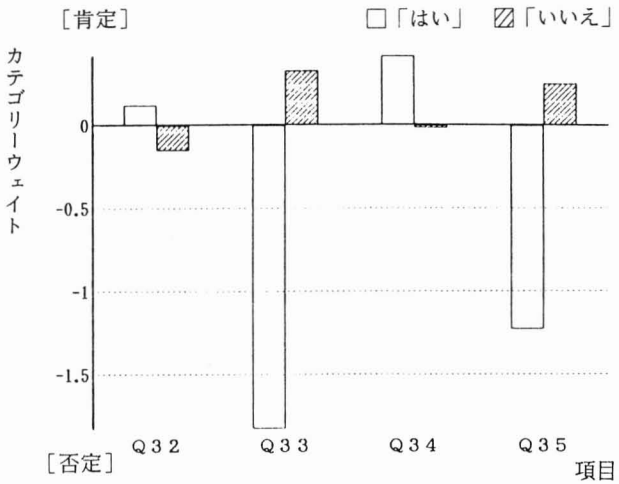

図２－９　身体的不安項目の分析（男子）

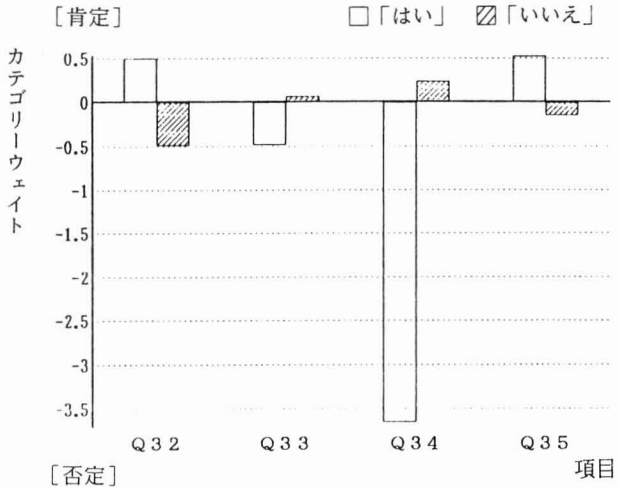

図２－10　身体的不安項目の分析（女子）

2－3　恐怖症項目の分析

Q25, Q26, Q27の項目が、恐怖症傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体では、Q25, Q27に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－11）。九州地区出身者はQ25, Q26で「はい」と答えた場合、Q101で「いいえ」と答えることが多い（図2－12）。沖縄地区出身者は、Q26, 27で「はい」と答えた者は、Q101で「いいえ」と答えることがわかった（図2－13）。男子学生では、Q25に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えていた（図2－14）。女子学生では、Q25, Q26, Q27の3項目ともに「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向が見られた（図2－15）。恐怖症項目に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える者が多いことがわかった。

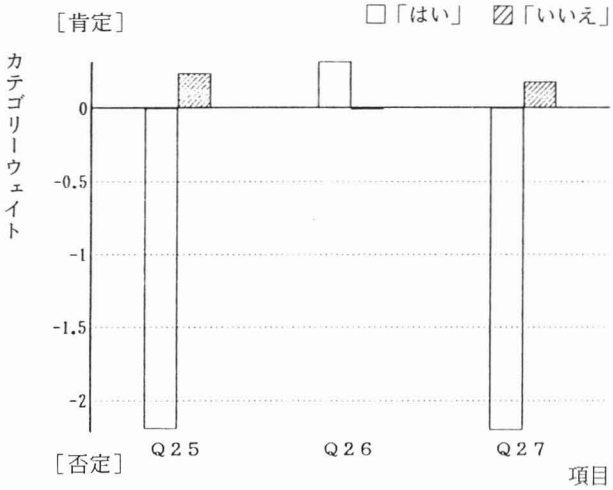

図2－11　恐怖症項目の分析（全体）

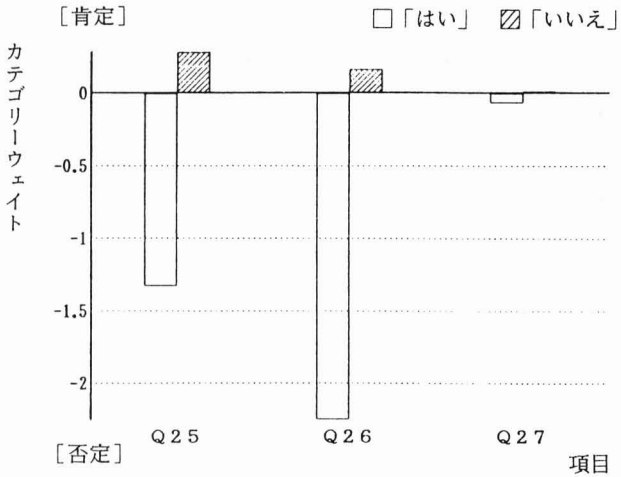

図２－12　恐怖症項目の分析（九州）

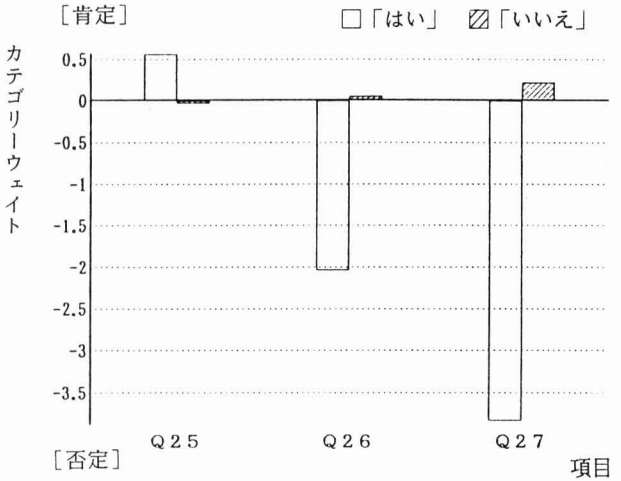

図２－13　恐怖症項目の分析（沖縄）

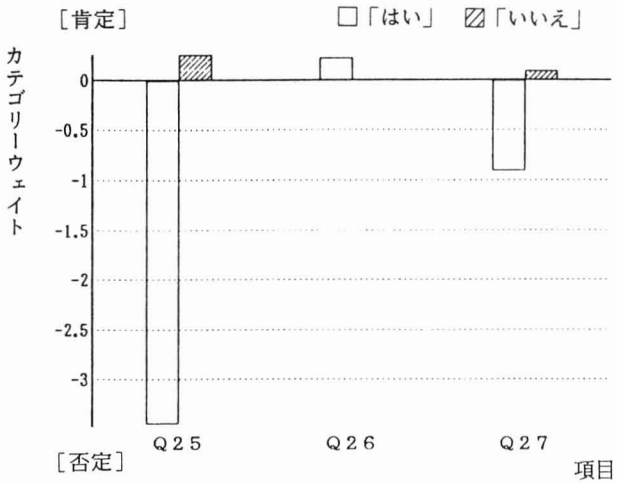

図2－14　恐怖症項目の分析（男子）

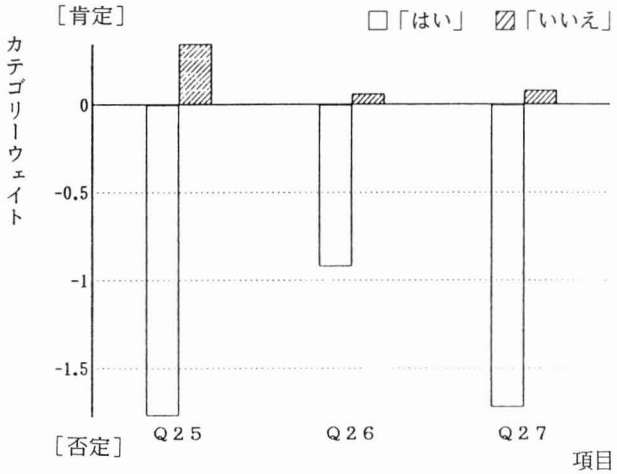

図2－15　恐怖症項目の分析（女子）

2－4　消化器系項目の分析

Q65, Q80, Q81, Q84の4項目が、消化器系の状態を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向として、Q65, Q80, Q84で「はい」と答える者はQ101で「いいえ」と答え、Q81で「はい」と答えた者は、Q101で「はい」と答える傾向にあることがわかった（図2－16）。九州地区出身者は、Q80で「はい」と答えた者はQ101でも「はい」と答え、Q81で「はい」と答えた者はQ101では「いいえ」と答えていた（図2－17）。沖縄地区出身者では、Q81に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答える傾向があった（図2－18）。男子学生では、Q81に「はい」と回答した者はQ101にも「はい」と答え、Q84に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えていることがわかった（図2－19）。女子学生では、Q65に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答し、Q81に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答える傾向があった（図2－20）。以上の結果から、消化器系の不調感を訴える者が、必ずしも第2志望者に多いとはいえない。男子学生、女子学生ともにQ81に「はい」と答えた者が第1志望と答える傾向が強いからである。従ってこれらの項目からQ101の結果を予測するのは困難であろう。

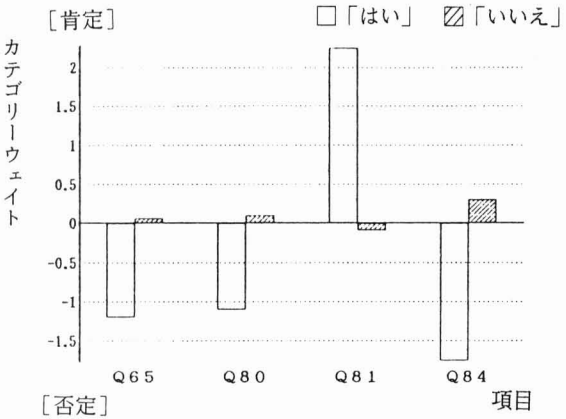

図2－16　消化器項目の分析（全体）

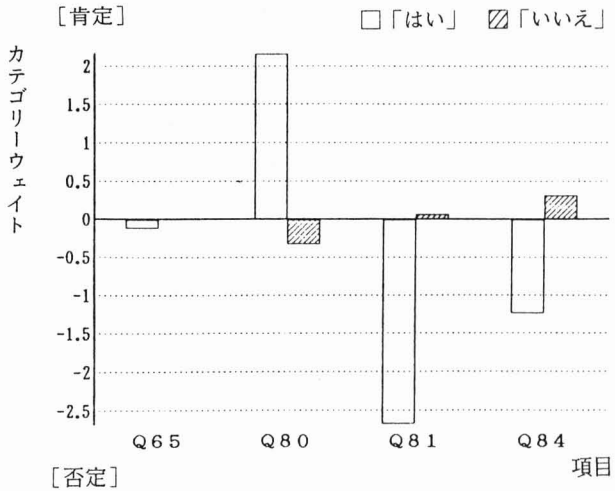

図2－17　消化器項目の分析（九州）

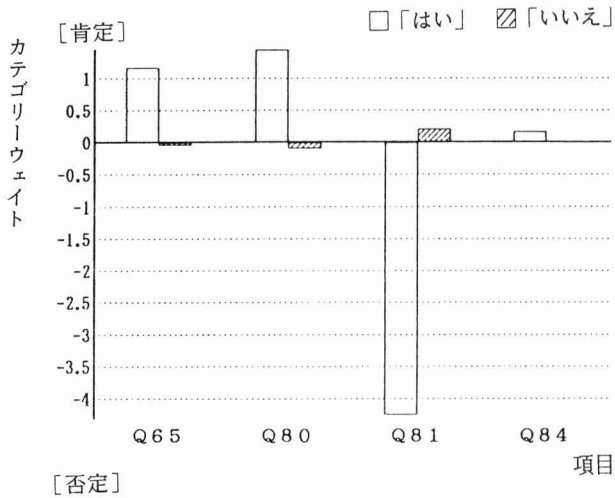

図2－18　消化器項目の分析（沖縄）

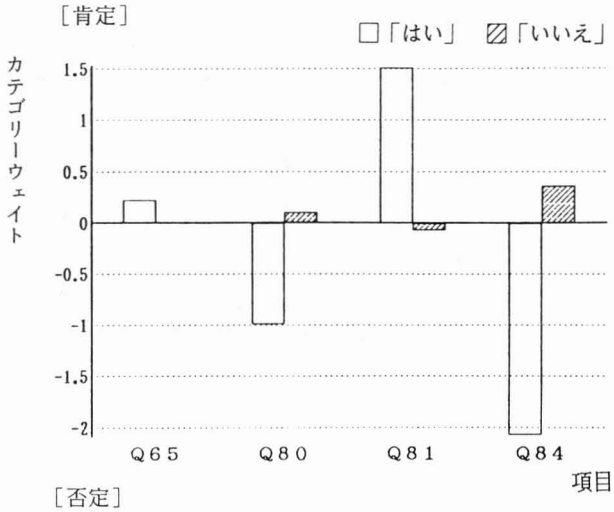

図２－19　消化器項目の分析（男子）

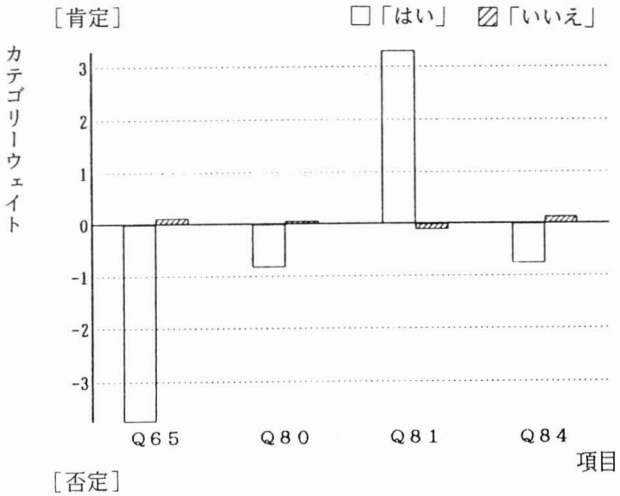

図２－20　消化器項目の分析（女子）

2－5　循環器系項目の分析

Q67, Q69, Q70, Q71, Q72の5項目が、循環器系の状態を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向は、Q69, Q70に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答え、Q71に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－21）。九州地区出身者では、Q70に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答える傾向があり、Q71に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と回答している（図2－22）。沖縄地区出身者では、Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えている（図2－23）。男子学生では、Q67, Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えている（図2－24）。女子学生では、Q69, Q70に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向がある（図2－25）。循環器系の不調感のなかではQ69とQ70が、Q101と関連が深く、第2志望者であること関連性がある。この2項目は明確な身体的異常というより、心理的圧迫感や緊張感を示唆する項目といえる。

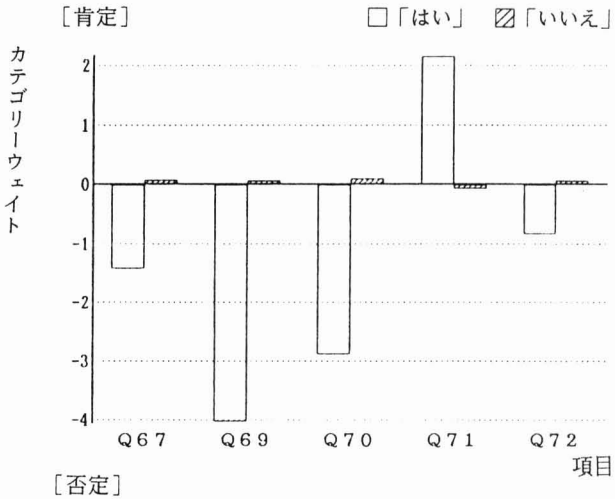

図2－21　循環器項目の分析（全体）

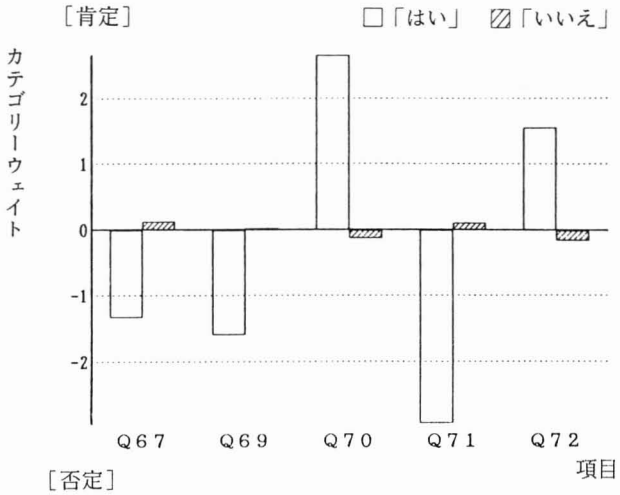

図２－22　循環器項目の分析（九州）

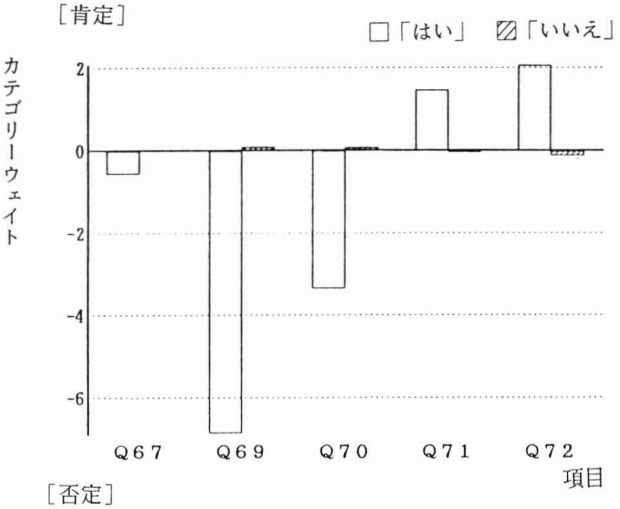

図２－23　循環器項目の分析（沖縄）

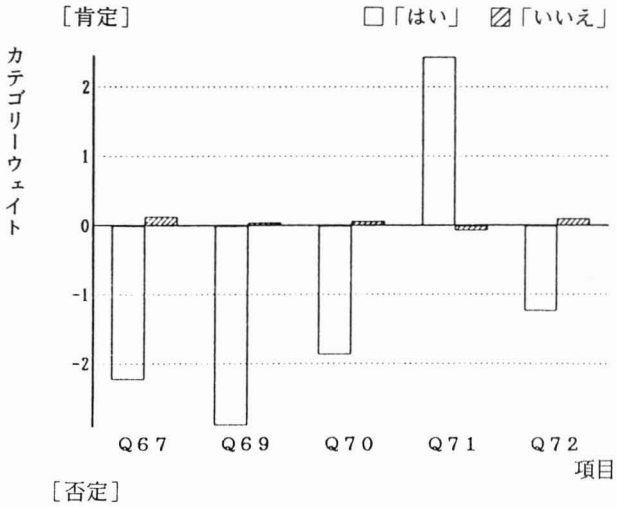

図２－24　循環器項目の分析（男子）

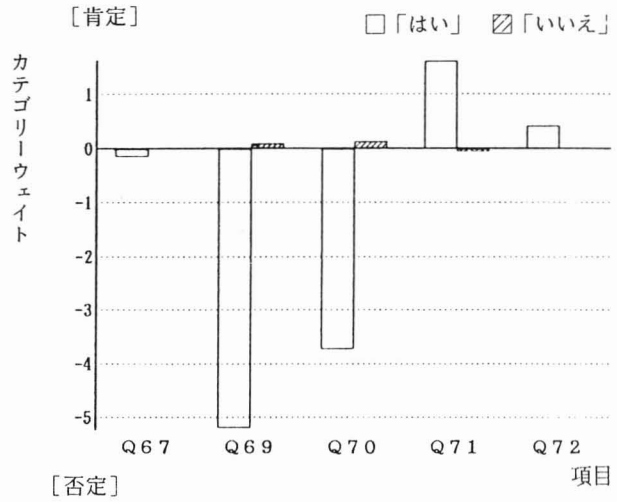

図２－25　循環器項目の分析（女子）

2－6　うつ病的項目の分析

Q44, Q45, Q46, Q49, Q50, Q51の6項目が、うつ病的傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体的傾向としては、Q51に「はい」と答える者は、Q101に「いいえ」と答える確率が高い（図2－26）。九州地区出身者で、Q44に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－27）。沖縄地区出身者では、Q51に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答える傾向が見られた（図2－28）。男子学生でも、Q51に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と回答することがわかった（図2－29）。また女子学生ではQ50, Q51に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－30）。以上の結果から九州地区出身者で、Q44の「何をしていても楽しくなく、気がめいりますか」に「はい」と答える者は第2志望者であることがわかった。またQ51の「いっそ死んでしまいたいとよく思いますか」の質問項目は、意欲の低下傾向と強く関連があることが示唆された。

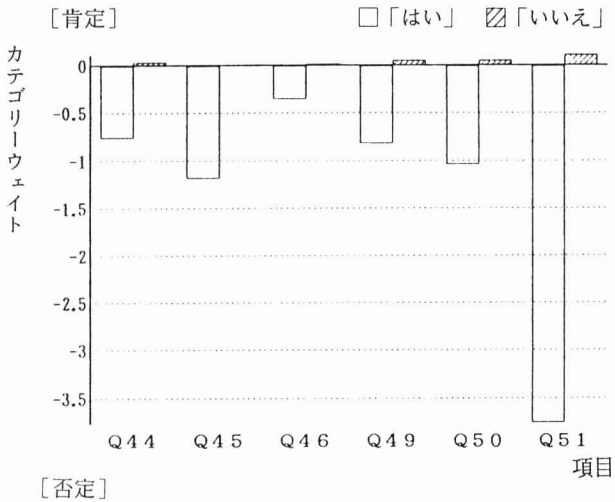

図2－26　うつ病項目の分析（全体）

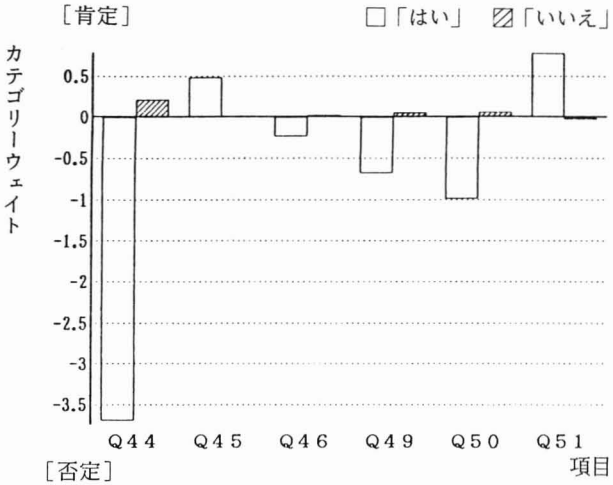

図２－27　うつ病項目の分析（九州）

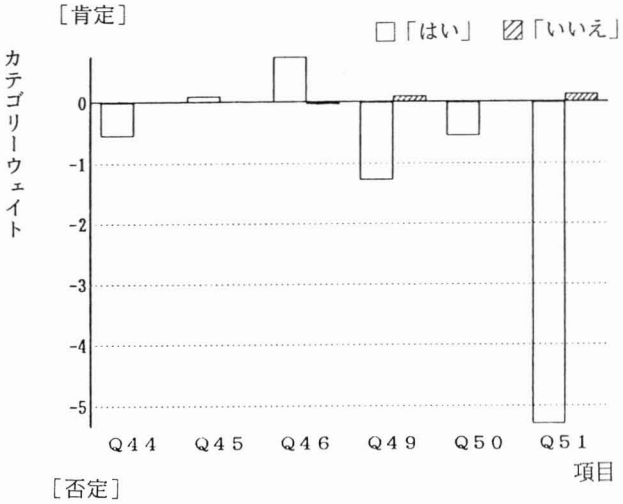

図２－28　うつ病項目の分析（沖縄）

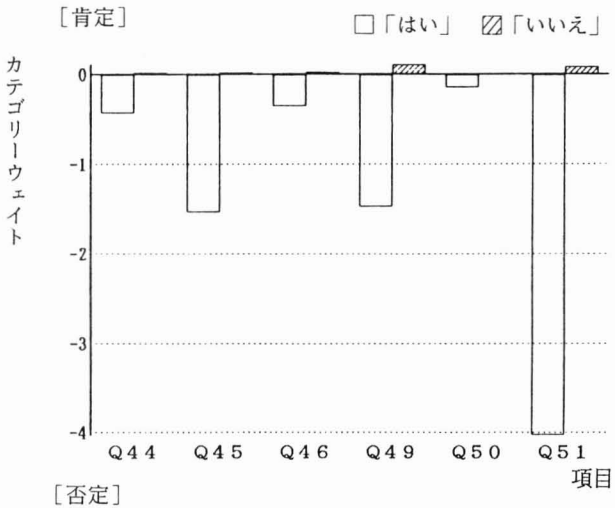

図２－29　うつ病項目の分析（男子）

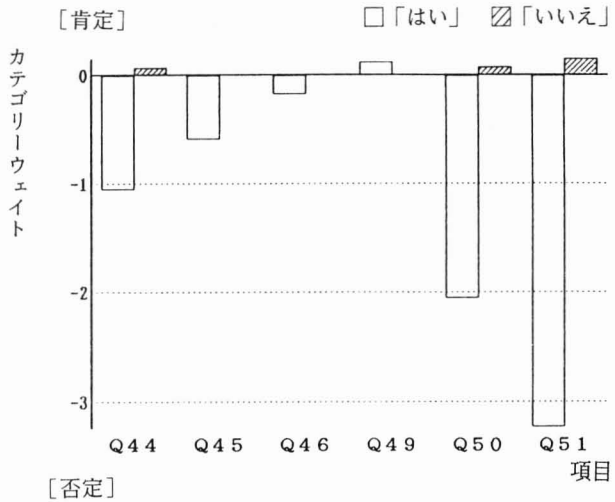

図２－30　うつ病項目の分析（女子）

2－7　分裂病的項目の分析

Q39, Q42, Q52, Q53, Q55, Q58の6項目、分裂病的傾向を示す項目として数量化Ⅲ類による分析結果から抽出されたので、これらの項目とQ101の関連を見ていくことにする。全体の傾向としては、Q42に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－31）。九州地区出身者ではQ53に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答えることがわかった（図2－32）。沖縄地区出身者では、Q42, Q55に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と答える傾向が見られた。またQ58に「はい」と答えた者はQ101に「はい」と答えることがわかった（図2－33）。男子学生では、Q42, Q55に「はい」と答えた者は、Q101に「いいえ」と答えることがわかった（図2－34）。女子学生では、Q42, 52に「はい」と答えた者はQ101に「いいえ」と回答する傾向があった（図2－35）。以上の結果から、九州地区出身者でQ53の「まわりの人や物を見て実感がわかぬように思いますか」や沖縄地区出身者でQ58の「目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできなくなりますか」を肯定する者が第1志望と関連があることは、予想とことなるものであった。しかしQ42の「不快な考えがくりかえし頭にうかんできて、はらいのけることができませんか」を肯定する者は第2志望であることと関連し、この項目は意欲の低下傾向を示唆するものであることがわかった。

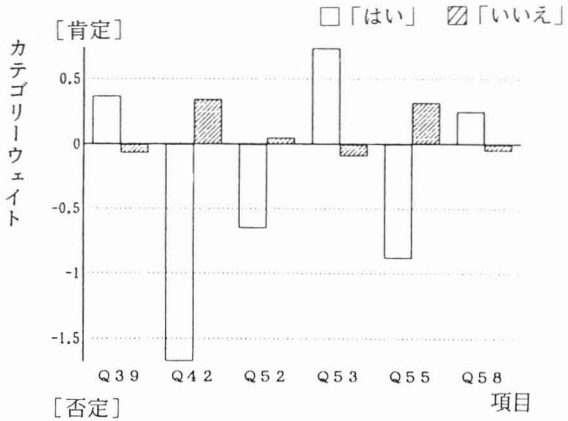

図2－31　分裂病項目の分析（全体）

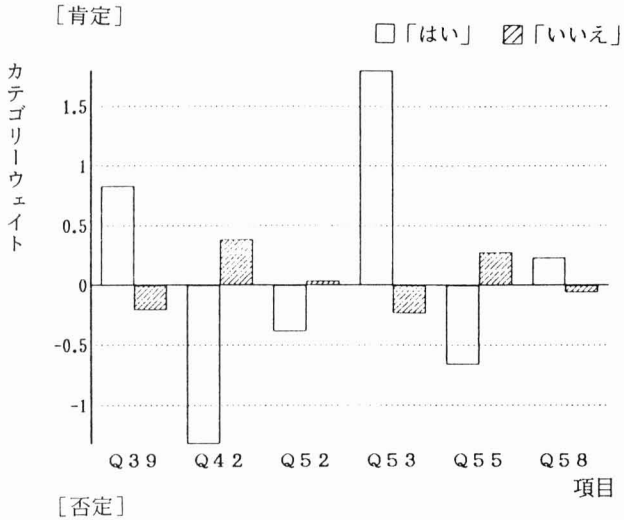

図２－32　分裂病項目の分析（九州）

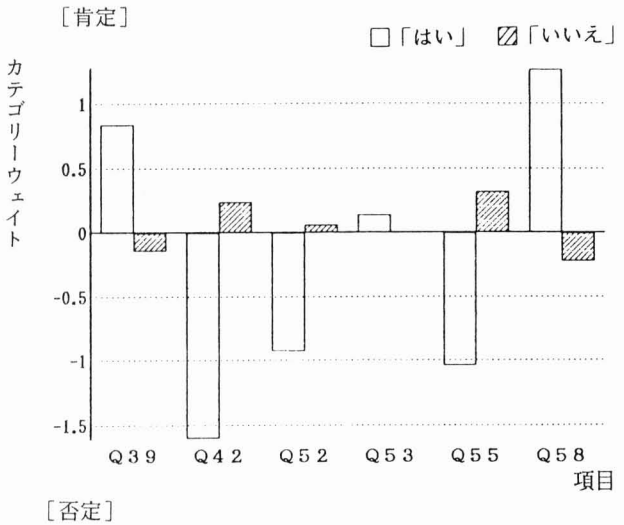

図２－33　分裂病項目の分析（沖縄）

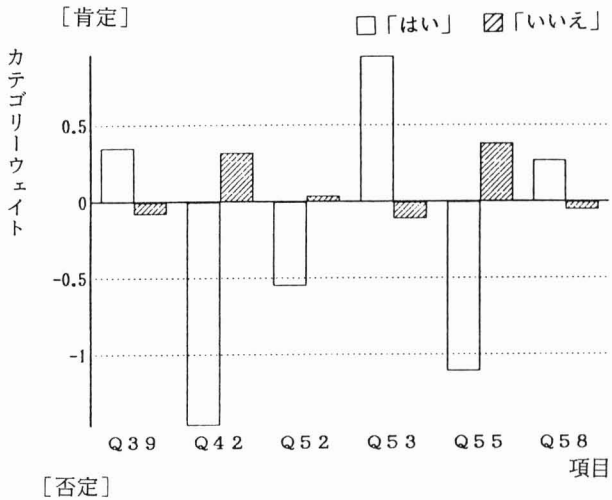

図2－34　分裂病項目の分析（男子）

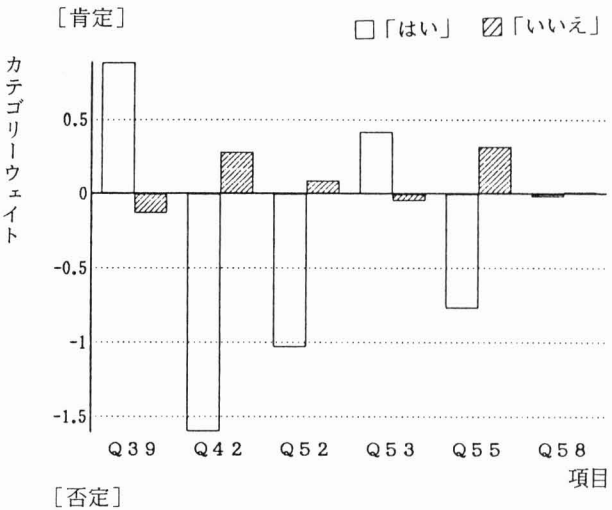

図2－35　分裂病項目の分析（女子）

今回の分析で使用された質問項目は次のようなものであった。▒▒の項目は、Q101の回答と関連の強い項目である。（　）の数字は、全体のなかで「はい」と答えられた比率である。

神経症的不安項目

▒Q22　いつも何かと心配ごとがありますか。（29.4）

Q23　ちょっとしたことがすべて気になって、気づかれしますか。(35.1)

Q24　はっきりした原因がないのに、いろいろのことが不安になりますか。（20.1）

▒Q29　いつも緊張していらいらしていますか。（3.6）

Q30　人の言動が気にさわっていらいらしますか。（22.7）

Q31　ちょっとしたことがカンにさわって腹が立ちますか。（22.2）

身体的不安項目

Q32　自分の身体や病気のことに非常に関心をもっていますか。（52.7）

▒Q33　自分の健康のことが心配で仕方がないですか。（14.9）

▒Q34　日によって体の具合の悪いところが移動しますか。（6.2）

Q35　その時の気分によって、症状がよくなったり、悪くなったりしますか。（19.1）

恐怖症項目

▒Q25　ひとりで外出するのが不安ですか。（10.1）

Q26　新聞やラジオでこわいニュースを見聞きするとひどくおびえますか。（3.8）

▒Q27　いつもそわそわして落着きませんか。（7.7）

消化器系項目

Q65　いつもあまり食欲がないですか。（5.5）

Q80　いつも胃がもたれたような感じがありますか。（8.9）

▒Q81　よく吐き気がしたり、吐いたりしますか。（4.0）

▒Q84　よく腹が痛みますか。（15.1）

循環器系項目

Q67　よく動きがしますか。(5.9)

Q69　胸を圧迫されるようで苦しいですか。(1.9)

Q70　脈が急に早くなったり、狂ったりしますか。(3.5)

Q71　よく息苦しくなることがありますか。(3.4)

Q72　急に体がかっと熱くなったり、寒気がしたりしますか。(7.3)

うつ病的項目

Q44　何をしても楽しくなく、気がめいりますか。(5.5)

Q45　いつも不幸で憂うつですか。(1.5)

Q46　何をするにもおっくうで意欲がわきませんか。(7.3)

Q49　たえず罪悪感(自分が何か悪いことをしたような感じ)に悩んでいますか。(7.0)

Q50　将来に全く希望が無いように思えますか。(4.8)

Q51　いっそ死んでしまいたいとよく思いますか。(3.2)

分裂病的項目

Q39　特定の状況(人の前で赤くなるなど)にたいする恐怖心がありますか(どんな状況ですか)。(21.4)

Q42　不快な考えがくりかえ頭にうかんできて、はらいのけることができませんか。(17.1)

Q52　自分が自分でないような感じがしますか。(8.0)

Q53　まわりの人や物を見て、実感がわかぬ(現実感がない)ように思いますか。(11.3)

Q55　劣等感が強いですか。(26.8)

Q58　目上の人が見ていると、仕事がさっぱりできなくなりますか。(17.1)

3節　数量化Ⅰ類による大学生活への「不安」の分析

前節の数量化Ⅱ類による大学生活への「意欲」の分析にひき続き、本節では大学生活への「不安」の得点を外的基準として、そして前回の数量化Ⅲ類の分析結果として抽出された神経症不安、不安の身体化、不安の外在化・顕在化、消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の下位項目を各々説明度数とする数量化Ⅰ類による分析を試みた。すなわち、各々の説明度数がどの程度、大学生活への「不安」を説明し、かつ各下位項目への回答パターンがどのように大学生活への「不安」を説明しているかの探索が行なわれた。以下、大学生活への「不安」と神経症不安、不安の身体化、不安の外在化・顕在化・消化器不調感、循環器不調感、うつ傾向、分裂傾向の関連について、地域差、性差を比較・検討しながら考察を進めていくことにする。

3－1　大学生活への「不安」と神経症不安

数量化Ⅲ類の分析によって抽出された神経症不安とは、Q22、Q23、Q24、Q29、Q30、Q31の合計で示される得点であり、隠蔽、抑圧された不安の存在を示しており、状況によってひき起こされる状態不安ではなく、かなり一貫した個人的傾性を示す特性不安と見なすことができる。すなわち、特性不安の存在は大学生活への「不安」の生起の仕方を大きく規定しているものと予想される。

図3－1は全被験者における大学生活への「不安」を外的基準、神経症不安の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。その結果、尺度全体と大学生活への「不安」との関わりはそれほど高くないことがわかる。このことは、大学生活への「不安」が特性的な神経症不安の有無に強く左右されず、初めて体験する沖縄・大学という環境が不安をひき起こしていることを意味している。それにもかかわらず、Q22「いつも何かと心配ごとがある」、Q29「いつも緊張していらいらしている」の2項目への肯定的反応はウエイトが高く、大学生活への「不安」に大きく関

係していることがわかる。逆に、Q23「ちょっとしたことがすべて気になって気づかれする」、Q30「人の言動が気にさわっていらいらする」、Q31「ちょっとしたことが気になって腹が立つ」の3項目へのウエイトは低く、大学生活への「不安」の生起にほとんど関与していないことを示している。

それでは、第一志望率において大きな差異を示していた九州と沖縄の出身者の大学生活への「不安」は、神経症的不安とどのようにかかわっているであろうか。図3－2、図3－3は九州各県出身者と沖縄県出身者の大学生活への「不安」を外的基準・そして神経症不安の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示しているが、両出身者ともQ22、Q24とのかかわりは認められ、特に出身地域差は認められない。

図3－4、図3－5は、男性、女性における数量化Ⅰ類の結果を示している。大学生活への「不安」に最も強くかかわっているのは、男女とも同様にQ22への肯定的反応であるが、性差の見られる項目がある。すなわち、男性ではQ24「はっきりした原因がないのにいろいろなことが不安になる」、Q29「いつも緊張していらいらしている」という項目への肯定的反応へのウエイトが高く、大学生活への「不安」と強く関係していることがわかる。

以上、述べてきたように、神経症的不安の有無が大きく大学生活への「不安」を予測させるものではないことがわかる。このような結果から、大学生活への「不安」は特性不安ではなく、状態不安であると見なした方がよいであろう。しかし、女性の場合とは異なり、男性の神経症不安は大学生活への「不安」と関係していることがわかる。

カテゴリウェイト　外的基準：FUANI

定数項 2.2150735

	度数	ウェイト	レンジ
Q(22)			0.9571797
YES	323	0.6730170	
NO	765	-0.2841627	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(23)			0.1692455
YES	386	0.1092007	
NO	702	-0.0600448	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(24)			0.3142712
YES	221	0.2504348	
NO	867	-0.0638363	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(29)			0.4213646
YES	36	0.4074223	
NO	1052	-0.0139422	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(30)			0.1083253
YES	244	0.0840318	
NO	844	-0.0242935	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(31)			0.0894920
YES	241	0.0696689	
NO	847	-0.0198231	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－１　大学生活への不安と神経症不安（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUANI

定数項 2.6708861

	度数	ウェイト	レンジ
Q(22)			0.9591421
YES	121	0.5918757	
NO	195	-0.3677264	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(23)			0.3355527
YES	124	0.2038801	
NO	192	-0.1316726	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(24)			0.0028159
YES	82	-0.0020852	
NO	234	0.0007307	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(29)			0.5895334
YES	13	0.5652804	
NO	303	-0.0242530	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(30)			0.1713718
YES	78	0.1290712	
NO	238	-0.0423006	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(31)			0.1754544
YES	76	0.1332565	
NO	240	-0.0421979	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－２　大学生活への不安と神経症不安（九州）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 1.9370315

	度数	ウェイト	レンジ
Q (22)			0.7933469
YES	160	0.6030388	
NO	507	-0.1903081	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (23)			0.1083441
YES	219	0.0727709	
NO	448	-0.0355733	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (24)			0.5436764
YES	110	0.4540146	
NO	557	-0.0896618	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (29)			0.0732441
YES	16	0.0714871	
NO	651	-0.0017570	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (30)			0.1239592
YES	137	0.0984983	
NO	530	-0.0254609	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (31)			0.0736474
YES	133	-0.0589621	
NO	534	0.0146853	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－３　大学生活への不安と神経症不安（沖縄）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.1892655

	度数	ウェイト	レンジ
Q (22)			0.9522866
YES	211	0.6684837	
NO	497	-0.2838029	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (23)			0.1295257
YES	236	0.0863504	
NO	472	-0.0431752	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (24)			0.3543997
YES	136	0.2863230	
NO	572	-0.0680768	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (29)			0.4916180
YES	31	0.4700923	
NO	677	-0.0215256	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (30)			0.1900198
YES	161	0.1468091	
NO	547	-0.0432107	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (31)			0.0591078
YES	156	0.0460840	
NO	552	-0.0130237	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－４　大学生活への不安と神経症不安（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2659574

	度数	ウェイト	レンジ
Q(22)			0.9960859
YES	111	0.7020286	
NO	265	-0.2940573	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(23)			0.2132517
YES	149	0.1287451	
NO	227	-0.0845067	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(24)			0.2278137
YES	84	0.1769191	
NO	292	-0.0508945	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(29)			0.0856867
YES	5	-0.0845472	
NO	371	0.0011395	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(30)			0.0429648
YES	83	-0.0334805	
NO	293	0.0094842	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(31)			0.1215859
YES	84	0.0944231	
NO	292	-0.0271628	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－５　大学生活への不安と神経症不安（女子）

3－2　大学生活への「不安」と不安の身体化

図3－6は全被験者の大学生活への「不安」を外的基準、不安の身体化の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果である。その結果、Q33「自分の健康のことが心配」、Q34「日によって体の具合の悪いところが移動する」、Q35「その時の気分によって症状がよくなったり悪くなったりする」という項目への肯定的反応のウエイトが高く、大学生活への「不安」と強くかかわっていることがわかる。Q32「自分の身体や病気のことに非常に関心をもっている」という項目は肯定・否定どちらもウエイトが低く、大学生活への「不安」と関係の弱いことがわかる。

出身地域別に検討していくと、図3－7、図3－8に示すように、Q34への肯定的反応に出身地域差が見られる。すなわち九州出身者のQ34への肯定的反応のウエイトが高い結果にある。

大学生活への「不安」と不安の身体化の関係には、出身地域差より性差が顕著である。図3－9、図3－10に示されるように、男子では、Q33、Q35への肯定的反応のウエイトが女子に比較して顕著に高いが、逆に女子ではQ34への肯定的反応のウエイトが顕著に高いことがわかる。この結果は女子の生理的機能に併なう心理的不安定感に関係した結果であろう。また女子ではQ32への肯定、否定どちらもウエイトが極端に低く、大学生活への「不安」と関係のないことがわかる。

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.2073394

	度数	ウェイト	レンジ
Q(32)			0.2647852
YES	573	0.1255908	
NO	517	-0.1391944	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(33)			0.6182267
YES	160	0.5274778	
NO	930	-0.0907489	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(34)			0.4263456
YES	67	0.4001390	
NO	1023	-0.0262066	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(35)			0.5579749
YES	206	0.4525227	
NO	884	-0.1054521	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－６　大学生活への不安と不安の身体化（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.6489028

	度数	ウェイト	レンジ
Q(32)			0.1780006
YES	167	0.0848153	
NO	152	-0.0931853	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(33)			0.5220019
YES	58	0.4270924	
NO	261	-0.0949094	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(34)			0.5172475
YES	23	0.4799538	
NO	296	-0.0372937	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(35)			0.6763426
YES	71	0.5258087	
NO	248	-0.1505339	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－７　大学生活への不安と不安の身体化（九州）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 1.9324324

	度数	ウェイト	レンジ
Q (32)			0.3056204
YES	344	0.1477624	
NO	322	-0.1578580	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (33)			0.4668118
YES	81	0.4100374	
NO	585	-0.0567744	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (34)			0.3019480
YES	34	0.2865332	
NO	632	-0.0154148	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (35)			0.5684186
YES	110	0.4745356	
NO	556	-0.0938829	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－８　大学生活への不安と不安の身体化（沖縄）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.1772152

	度数	ウェイト	レンジ
Q (32)			0.4051265
YES	387	0.1846146	
NO	324	-0.2205119	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (33)			0.6854267
YES	109	0.5803472	
NO	602	-0.1050795	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (34)			0.2773078
YES	43	0.2605368	
NO	668	-0.0167711	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (35)			0.7037860
YES	121	0.5840137	
NO	590	-0.1197723	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－９　大学生活への不安と不安の身体化（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2666667

	度数	ウェイト	レンジ
Q(32)			0.0335508
YES	185	0.0169991	
NO	190	-0.0165517	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(33)			0.4529797
YES	51	0.3913744	
NO	324	-0.0616052	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(34)			0.6958570
YES	24	0.6513221	
NO	351	-0.0445348	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(35)			0.3747629
YES	85	0.2898167	
NO	290	-0.0849463	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－10　大学生活への不安と不安の身体化（女子）

3－3　大学生活への「不安」と不安の外在化

神経症不安は自覚が困難であり、姿を変えて表現されることが多い。すなわち、外界に投射し、恐怖症に結びつくことが多いと考えられる。このような観点から見ると、不安の外在化の程度と大学生活への「不安」には関係の強いことが予想される。

図3－11は大学生活への「不安」を外的基準、不安の外在化の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析結果である。その結果、Q25「ひとりで外出するのが不安」という項目への肯定的反応のウエイトだけが高く、Q26「新聞やラジオでこわいニュースを見聞するとひどくおびえる」、Q27「いつもそわそわして落ちつかない」に対する反応のウエイトは低い結果にある。出身地域別では、九州と沖縄に大きな差異は見られないが、Q26への肯定・否定のウエイトが九州と沖縄では逆転した結果になっている(図3－12、図3－13)。

続いて性差について検討していく。図3－14、図3－15に示されるように、女子ではQ26、Q27への肯定的反応のウエイトが高く、女子の恐怖症傾向は大学生活への「不安」を十分に予測させている。この結果から、女子の恐怖症傾向は般化の程度が大きいことがわかる。

当初予測したように、不安の外在化は大学生活への「不安」を十分には予測しえていないが、Q25、Q26。Q27に対する通過率が極端に低いことと無関係ではないであろう。

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.2165138

	度数	ウェイト	レンジ
Q (25)			0.8488111
YES	110	0.7631512	
NO	980	-0.0856598	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (26)			0.1074593
YES	40	0.1035159	
NO	1050	-0.0039435	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (27)			0.2247786
YES	82	0.2078687	
NO	1008	-0.0169100	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－11　大学生活への不安と不安の外在化（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.6656250

	度数	ウェイト	レンジ
Q (25)			0.8255303
YES	57	0.6784827	
NO	263	-0.1470476	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (26)			0.2525798
YES	21	-0.2360042	
NO	299	0.0165755	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (27)			0.2125293
YES	37	0.1879556	
NO	283	-0.0245737	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－12　大学生活への不安と不安の外在化（九州）

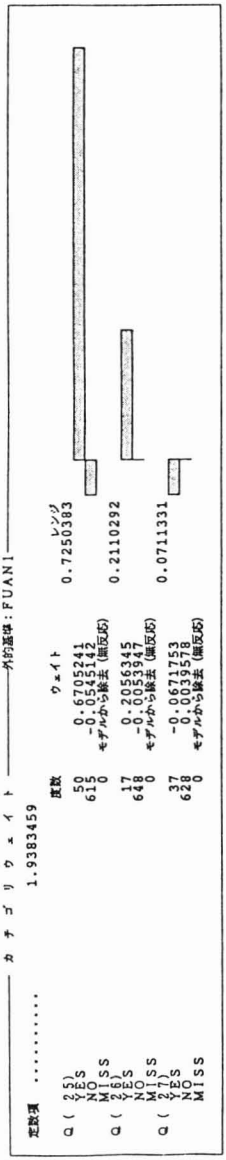

図３－13　大学生活への不安と不安の外在化（沖縄）

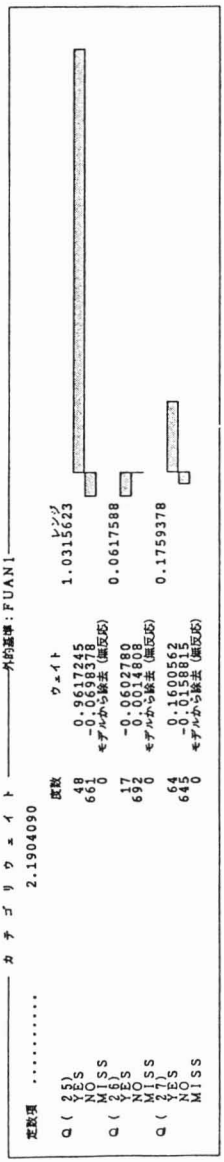

図３－14　大学生活への不安と不安の外在化（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2679045

	度数	ウェイト	レンジ
Q(25)			0.6777249
YES	62	0.5662688	
NO	315	-0.1114561	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(26)			0.2562096
YES	23	0.2405788	
NO	354	-0.0156308	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(27)			0.3868191
YES	18	0.3683503	
NO	359	-0.0184688	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－15　大学生活への不安と不安の外在化（女子）

3－4　大学生活への「不安」と消化器不調感

先述した不安の身体化が漠然とした心身症を想起させるのに対して、明確な形での心身症の有無とそれを自覚させているのが消化器不調感と後述する循環器不調感である。このような予測から消化器不調感があることは特性レベルでの不安が高く、従って大学生活への「不安」の生起も高いことが考えられる。

図3－16は全被験者を対象として、大学生活への「不安」を外的基準、消化器不調感の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示してある。図からわかるようにQ65「いつもあまり食欲がない」、Q80「いつも胃がもたれるような感じがする」、Q81「よく吐き気がしたり、吐いたりする」、Q84「よく腹が痛む」という消化器不調感への肯定的反応へのウエイトが高く、消化器不調感は大学生活への「不安」をいだくかどうかに大きくかかわっているといえる。

出身地域別による差異を検討してみると、図3－17、図3－18に示されるように、九州出身者は沖縄出身者に比較して、Q81への肯定的反応だけのウエイトが高く、逆に沖縄出身者は、Q65への肯定的反応へのウエイトが高く、出身地域によって、大学生活への「不安」と結びつく消化器不調感の部位に差異のあることがわかる。

次いで性差について検討してみる。図3－19、図3－20に示されるように、男子ではQ80、Q81への肯定的反応のウエイトが高く、女子ではQ65、Q84への肯定的反応へのウエイトが高く、性差が若干見られている。

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.2110092

	度数	ウェイト	レンジ
Q(65)			0.4620188
YES	58	0.4374344	
NO	1032	-0.0245045	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(80)			0.3223727
YES	97	0.2936845	
NO	993	-0.0286882	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(81)			0.5432136
YES	45	0.5207873	
NO	1045	-0.0224262	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(84)			0.3513357
YES	165	0.2981518	
NO	925	-0.0531838	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－16　大学生活への不安と消化器不調感（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.6457680

	度数	ウェイト	レンジ
Q(65)			0.2761370
YES	25	0.2544962	
NO	294	-0.0216408	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(80)			0.1763986
YES	42	0.1531737	
NO	277	-0.0232249	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(81)			0.8973338
YES	9	0.8720172	
NO	310	-0.0253166	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(84)			0.2242954
YES	65	0.1785926	
NO	254	-0.0457028	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－17　大学生活への不安と消化器不調感（九州）

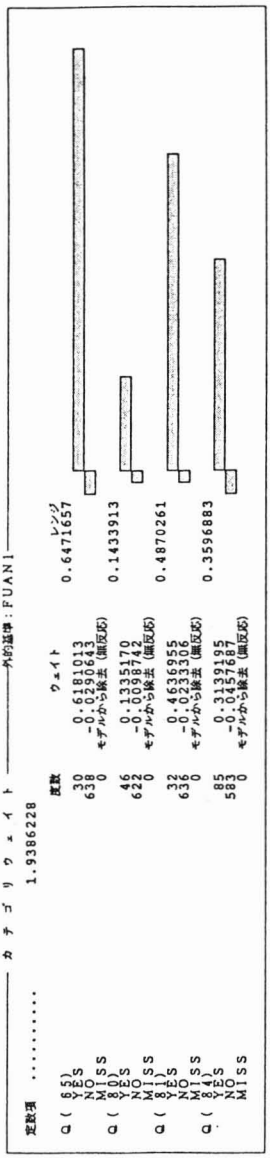

図３－18　大学生活への不安と消化器不調感（沖縄）

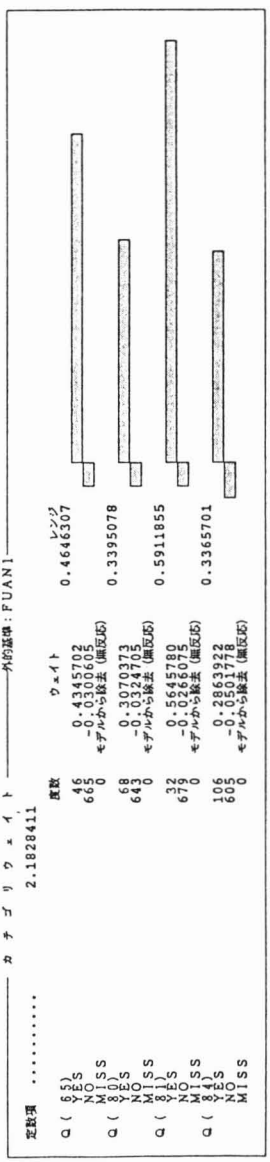

図３－19　大学生活への不安と消化器不調感（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2666667

	度数	ウェイト	レンジ
Q (65)			0.5013438
YES	12	0.4853008	
NO	363	-0.0160430	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (80)			0.2681999
YES	28	0.2481743	
NO	347	-0.0200256	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (81)			0.4378698
YES	13	0.4226904	
NO	362	-0.0151795	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (84)			0.3715880
YES	59	0.3131249	
NO	316	-0.0584632	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－20　大学生活への不安と消化器不調感（女子）

3－5　大学生活への「不安」と循環器系不調感

消化器系不調感と同様に心身症の存在を具体的に明確にしているのが、循環器不調感である。消化器不調感と同様にここでも循環器不調感の有無はその背後に強い特性不安のあることが予想され、大学生活への「不安」の生起を予測させるものである。

図3－21は全被験者を対象として、大学生活への「不安」を外的基準、循環器不調感の各項目を説明度数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。図に示される結果から、全体的に各項目への肯定的反応が、大学生活への「不安」の生起に関与していることがわかるが、特にQ67「よく動悸がする」への肯定的反応のウエイトが高いことがわかる。Q69「胸を圧迫されるように苦しい」、Q70「脈が急に早くなったり狂ったりする」、Q71「よく息苦しくなる」、Q72「急に体がかっと熱くなったり、寒けがしたりする」という項目への肯定的反応のウエイトはそれほど高いとはいえない。すなわち、動悸の有無は強く大学生活への「不安」の生起に関与していることがわかる。

循環器不調感が大学生活への「不安」を予測するかどうかに関しては出身地域差が若干見られる。すなわち、Q67の動悸の項目では九州出身者のウエイトが高く、Q69の胸部の苦痛感では沖縄出身者のウエイトが高い結果を示している。（図3－32、図3－23）。

循環器不調感が大学生活への「不安」の生起を説明するかどうかについては性差が顕著である。図3－24、図3－25に示されるような結果から、男子ではQ67、Q71、Q72への肯定的反応のウエイトが高く、動悸、息苦しさ、体温の急変の有無が大学生活への「不安」の生起に強く関与している。しかし、女子ではQ71、Q72へのウエイトはほとんど見られていない。逆に女子ではQ69、Q70への肯定的反応のウエイトが高く、胸部圧迫感、不整脈の有無が大学生活への「不安」の生起を説明している結果にある。

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.2108656

	度数	ウェイト	レンジ
Q (67)			0.5030937
YES	63	0.4739087	
NO	1023	-0.0291850	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (69)			0.2175001
YES	19	0.2136949	
NO	1067	-0.0039053	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (70)			0.3053235
YES	37	0.2949211	
NO	1049	-0.0104024	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (71)			0.2566350
YES	34	0.2486004	
NO	1052	-0.0080346	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (72)			0.2034035
YES	77	0.1889817	
NO	1009	-0.0144218	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－21　大学生活への不安と循環器不調感（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.6635220

	度数	ウェイト	レンジ
Q (67)			0.5729579
YES	29	0.5207070	
NO	289	-0.0522509	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (69)			0.3854694
YES	6	-0.3781964	
NO	312	0.0072730	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (70)			0.1018023
YES	16	0.0966801	
NO	302	-0.0051221	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (71)			0.3193408
YES	11	0.3082945	
NO	307	-0.0110464	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (72)			0.3110553
YES	31	0.2807323	
NO	287	-0.0303230	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－22　大学生活への不安と循環器不調感（九州）

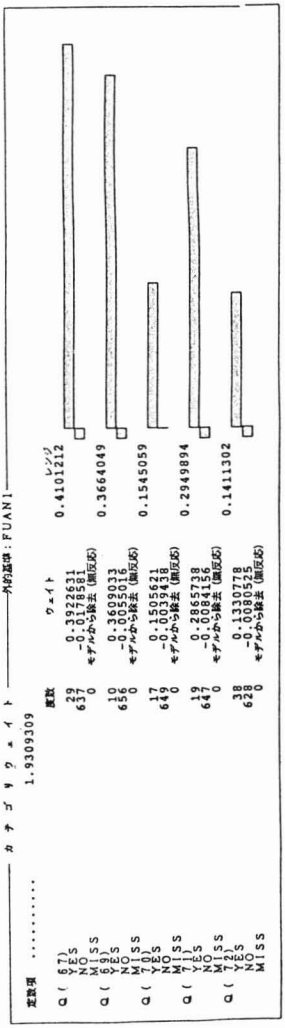

図３－23　大学生活への不安と循環器不調感（沖縄）

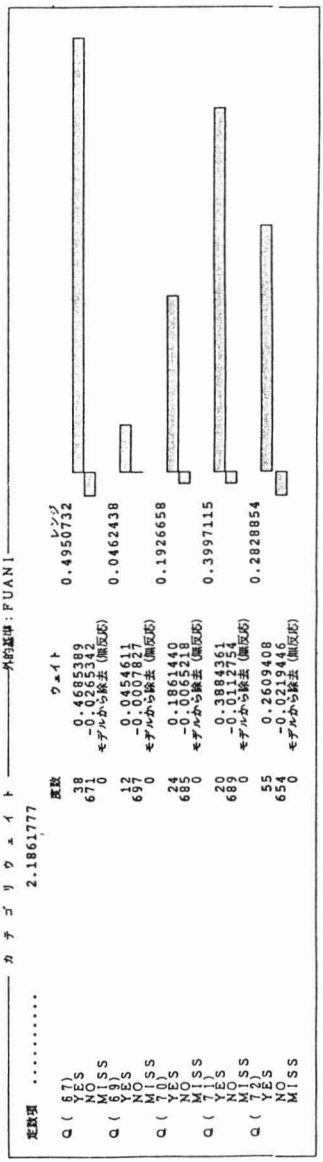

図３－24　大学生活への不安と循環器不調感（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2600536

	度数	ウェイト	レンジ
Q(67)			0.4644804
YES	25	0.4333490	
NO	348	-0.0311314	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(69)			0.6223845
YES	7	0.6107043	
NO	366	-0.0116801	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(70)			0.5512096
YES	13	0.5319986	
NO	360	-0.0192111	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(71)			0.0571631
YES	14	-0.0550176	
NO	359	0.0021455	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q(72)			0.0156517
YES	21	-0.0147705	
NO	352	0.0008812	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図3－25　大学生活への不安と循環器不調感（女子）

3－6　大学生活への「不安」とうつ傾向

これまで説明変数として用いた各要因は不安神経症レベルの問題と関係していたのに対し、うつ傾向、分裂傾向の項目はより重篤な精神病理的な問題に関係していることになる。このような観点からすると、うつ傾向、分裂傾向の有無はより強い、複雑な特性不安の有無を予測させ、日常生活における適応行動を大きく阻害する要因として浮び上がってくる。

先ず大学生活への「不安」とうつ傾向の関係について検討する。図3－26は全被験者を対象として、大学生活への「不安」を外的基準、うつ傾向の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類の分析結果を示している。Q51「いっそ死んでしまいたい」という項目を除き、Q44「何をしても楽しくなく気がめいる」、Q45「いつも不幸で憂うつ」、Q46「何をするにもおっくうで意欲がわかない」、Q49「たえず罪悪感に悩んでいる」、Q50「将来に全く希望がないように思える」への肯定的反応のウエイトが高く、うつ傾向の有無が大学生活への「不安」の生起に強く関係していることがわかる。

出身地域別に比較してみると九州出身者はQ44、Q49、Q50への肯定的反応のウエイトが沖縄出身者より高く、九州出身者のうつ傾向は大学生活への「不安」と強く関係していることがわかる。（図3－27、図3－28）。

性別では男子においてQ44、Q49、Q50における肯定的反応のウエイトが女子より高く、逆に女子ではQ45への肯定的反応のウエイトのみが高い結果を示している。多分に要求水準が高い男子の方が要求の満たされないことに帰因するうつ傾向が高いことを反映した結果であろうと思われる（図3－29、図3－30）。

カテゴリウェイト　外的基準：FUANI

定数項 2.2104300

	度数	ウェイト	レンジ
Q (44)			0.5568534
YES	58	0.5273040	
NO	1035	-0.0295494	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (46)			0.2316886
YES	78	0.2151546	
NO	1015	-0.0165340	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (49)			0.5974219
YES	74	0.5569743	
NO	1019	-0.0404476	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (50)			0.4900013
YES	50	0.4675858	
NO	1043	-0.0224154	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (51)			0.1161467
YES	33	0.1126399	
NO	1060	-0.0035067	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－26　大学生活への不安とうつ傾向（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUANI

定数項 2.6593750

	度数	ウェイト	レンジ
Q (44)			1.2285263
YES	18	1.1594217	
NO	302	-0.0691046	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (45)			0.3523315
YES	6	-0.3457252	
NO	314	0.0066062	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (46)			0.2855718
YES	31	0.2579070	
NO	289	-0.0276648	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (49)			0.6747474
YES	23	0.6262499	
NO	297	-0.0484975	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (50)			0.5656812
YES	19	0.5320939	
NO	301	-0.0335873	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (51)			0.0247710
YES	13	-0.0237646	
NO	307	0.0010063	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－27　大学生活への不安とうつ傾向（九州）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 1.9327354

	度数	ウェイト	レンジ
Q (44)			0.1730303
YES	33	0.1644952	
NO	636	-0.0085351	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (45)			0.1149204
YES	6	-0.1138897	
NO	663	0.0010307	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (46)			0.3456153
YES	39	0.3254674	
NO	630	-0.0201480	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (49)			0.4976910
YES	45	0.4642141	
NO	624	-0.0334770	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (50)			0.2688569
YES	22	0.2600155	
NO	647	-0.0088413	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (51)			0.0601240
YES	17	-0.0585961	
NO	652	0.0015278	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－28　大学生活への不安とうつ傾向（沖縄）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.1823282

	度数	ウェイト	レンジ
Q (44)			0.7803686
YES	32	0.7453450	
NO	681	-0.0350236	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (45)			0.0142351
YES	12	0.0139955	
NO	701	-0.0002396	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (46)			0.1230564
YES	54	0.1137366	
NO	659	-0.0093198	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (49)			0.4968851
YES	50	0.4620405	
NO	663	-0.0348447	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (50)			0.5708656
YES	35	0.5428427	
NO	678	-0.0280229	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (51)			0.2695284
YES	16	0.2634801	
NO	697	-0.0060483	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－29　大学生活への不安とうつ傾向（男子）

カテゴリウェイト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2659574

	度数	ウェイト	レンジ
Q (44)			0.2459055
YES	26	0.2289014	
NO	350	-0.0170041	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (45)			0.5702045
YES	3	0.5656550	
NO	373	-0.0045495	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (46)			0.3640451
YES	24	0.3408082	
NO	352	-0.0232369	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (49)			0.7725488
YES	24	0.7232372	
NO	352	-0.0493116	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (50)			0.2454138
YES	15	0.2356234	
NO	361	-0.0097904	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (51)			0.0516249
YES	17	-0.0492908	
NO	359	0.0023341	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－30　大学生活への不安とうつ傾向（女子）

3－7　大学生活への「不安」と分裂傾向

数量化Ⅲ類による分析の結果、Q39、Q42、Q52、Q53、Q55、Q58に高い負荷を示した項目は、恐怖、強迫、離人感、劣等感、対人緊張をその特徴としていることから、分裂傾向に関与している尺度と見なした。多分に自我機能の低下を中心とした病的傾向であると思われる。これまでと同様に、大学生活への「不安」を外的基準、分裂傾向の各項目を説明変数とする数量化Ⅰ類による分析結果が図3－31である。図からわかるように、Q55の現実感喪失の項目を除き、他のすべての項目への肯定的反応のウエイトが高く、分裂傾向は、大学生活への「不安」の生起をよく説明しうる要因となっている。Q55の現実感の喪失は、地域別、性別による分析でもウエイトが極端に低いが、この結果は現実感の喪失が強い自我障害と結びつくことと関係しているかも知れない。

図3－32、図3－33は出身地域別に示した数量化Ⅰ類の結果を示している。図から地域別に差異のあることがわかる。九州出身者ではQ52「自分が自分でないような感じがする」、Q53「劣等感が強い」への肯定的反応のウエイトが高く、自我の離人感と強い劣等感が大学生活への「不安」を強く説明している。それに対して沖縄出身者は、Q39「特定の状況に対する恐怖心がある」への肯定的反応へのウエイトが高い結果を示し、出身地域差が見られている。

次に性差について比較してみる。男子では、Q39、Q52、Q55への肯定的反応のウエイトが高く、女子ではQ58への肯定的反応へのウエイトのみが高い結果にある。このような結果から、女子より男子の自我機能の障害が高く、より強く大学生活への「不安」に結びついているものと考えられる（図3－34、図3－35）。

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.2040441

	度数	ウェイト	レンジ
Q (39)			0.4901548
YES	185	0.4068105	
NO	903	-0.0833443	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (42)			0.3128180
YES	184	0.2599150	
NO	904	-0.0529031	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (52)			0.3450524
YES	88	0.3171437	
NO	1000	-0.0279086	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (53)			0.0455894
YES	121	-0.0405193	
NO	967	0.0050701	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (55)			0.6226632
YES	290	0.4566960	
NO	798	-0.1659672	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (58)			0.5519004
YES	186	0.4575498	
NO	902	-0.0943506	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－31　大学生活への不安と分裂傾向（全体）

カテゴリウェイト　外的基準：FUAN1

定数項 2.6477987

	度数	ウェイト	レンジ
Q (39)			0.2534966
YES	65	0.2016813	
NO	253	-0.0518153	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (42)			0.2195387
YES	73	0.1691415	
NO	245	-0.0503973	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (52)			0.4078079
YES	33	0.3654882	
NO	285	-0.0423197	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (53)			0.1119895
YES	37	0.0989593	
NO	281	-0.0130302	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (55)			0.9842619
YES	96	0.6871262	
NO	222	-0.2971357	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (58)			0.5032345
YES	67	0.3972071	
NO	251	-0.1060274	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－32　大学生活への不安と分裂傾向（九州）

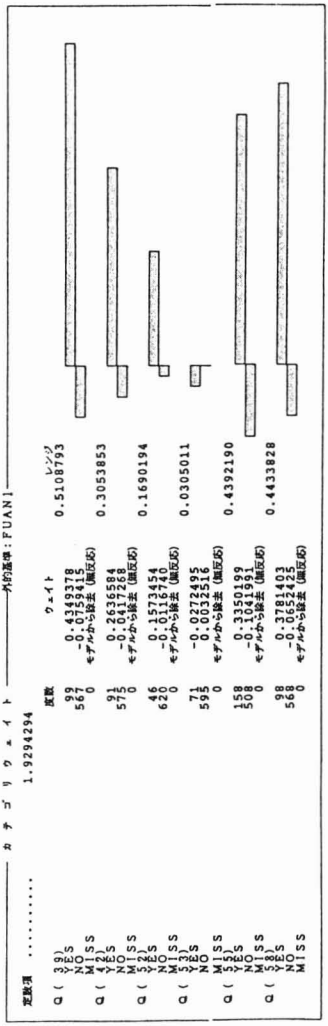

図３－33　大学生活への不安と分裂傾向（沖縄）

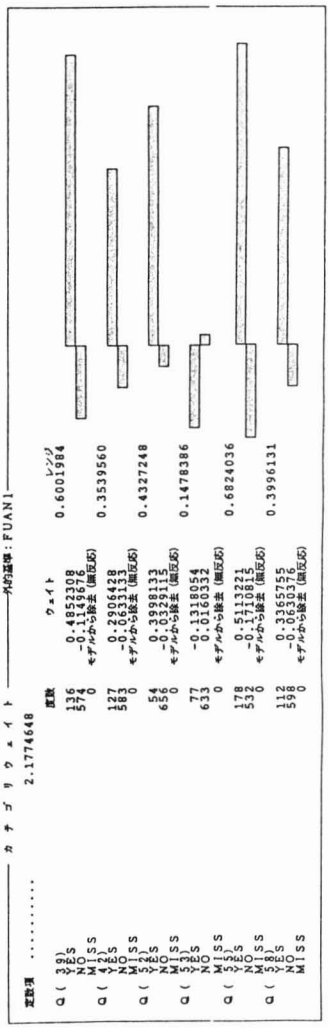

図３－34　大学生活への不安と分裂傾向（男子）

カ テ ゴ リ ウ ェ イ ト　　外的基準：FUAN1

定数項 2.2566845

	度数	ウェイト	レンジ
Q (39)			0.2751506
YES	49	0.2391014	
NO	325	-0.0360491	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (42)			0.2570650
YES	57	0.2178866	
NO	317	-0.0391783	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (52)			0.2137637
YES	33	0.1949022	
NO	341	-0.0188615	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (53)			0.1245065
YES	42	0.1105245	
NO	332	-0.0139820	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q (55)			0.5591692
YES	110	0.3947077	
NO	264	-0.1644615	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	
Q.(58)			0.7105881
YES	73	0.5718904	
NO	301	-0.1386977	
MISS	0	モデルから除去（無反応）	

図３－35　大学生活への不安と分裂傾向（女子）

以上に述べてきたように、新入生がいだく大学生活への「不安」に、不安神経症、心身症、うつ傾向、分裂傾向が少なからず関与していることがわかる。しかし、具体的にどのような症状がよく大学生活への「不安」を説明するかについては、出身地域、性によって多少とも異なることがわかる。ここで改めて出身地域別、性別などの主なデモグラフィック要因に基づく分類を施した上での数量化Ⅲ類による尺度の分類が必要となってくる。

参考文献

上地安昭　1973　現代人と神経症　保健シリーズ第18集、広島大学保健管理センター（編）

笠原　嘉　1977　青年期－精神病理学から－　中央公論社

中村完・新里里春・島袋恒男・井村修、1986、大学生の適応に関する心理学的研究－琉球大学の新入生を対象として－、琉球大学法文学部紀要　社会学編　第29号

藤土圭三編　1979　現代学生の精神衛生－若者指導のためのハンドブック－、北大路書房